

## 【水の作文大賞】

いつまでも故郷が故郷であるために

熊本県

玉名市立玉陵中学校

三年

坂口 実

少し涼しい六月のある日。早めに夕食を済ませた子供たちは、夜の中にとびこんでいく。走り出す子もいれば、暗闇の中で一人にならないように友達と手をつないで進む子もいる。でも、次第に夜への不安はなくなり、皆の目に黄色の光が輝いてみえる。

私の住む玉陵中校区には、数年前まで六つの小学校があった。子供の数の減少など様々な理由から平成三十年に統合したが、それまでは同級生が八人という世界でのびのびと毎日を送っていた。

そんな小さな学校に「ホタル鑑賞会」と「ホタル放流会」という行事があった。ホタル観賞会が六月で放流会が十一月に行われる。

ホタル観賞会では、全校児童と保護者、先生、そしてホタル保存会の方々などたくさんの方が集まってホタルが飛び交う景色を楽しむ。私は小学二年生のとき初めてホタルを見たが、初夏の闇夜を飛び交う光に子どもながらに感動した。

一方、ホタル放流会は、鑑賞会が行われた川の上流に行きホタルの幼虫を放流する。華やかな鑑賞会と比べ、少々地味な感じがした。しかし、この放流会があるから鑑賞会ができることを毎年この活動に参加してだんだんわかってきた。

ホタル放流会では、幼虫の放流の他にホタルについてのクイズ大会や、ホタル保存会の方の話、ホタルが住む川の水质検査もある。クイズ大会ではみんな自分に当ててと言わんばかりに手をあげていた。みんなより一年おくれて参加するようになった私はクイズの答えを聞いて、初めて学ぶことがたくさんあった。ホタル保存会の方の話では、ホタルが住む川を守るためだけでなく地球を守るためにも川は綺麗にしなければならぬことを教えてもらった。水质検査を行うのは、ホタルのエサとなるカワニナが生きていける水環境が確かめるため

である。このカワニナには綺麗な水が必要不可欠である。私たちの川は、一番綺麗という値を示していた。上流の方だし綺麗なのは当たり前だと思っていたが、実はこの活動を始めたのも川が汚れてホタルが減り、保存会会長さんの娘さんが「ホタルが飛ばないのは寂しいね」と言ったのがきっかけだそう。私は正直驚いた。こんなに綺麗な川にもそんな時代があったなんて。なんだか悲しい気分になった。それと同時にこのホタルの飛び交う川も守りたいと思った。

川を綺麗に保つためには、単にごみを捨てないではなく、限りある水を無駄遣いしすぎないことが必要である。生活排水が直接川に流されるわけではないが、やはり水は使った分だけなんらかの影響がある。水は人間だけのものではない。私達も自然の一部である水を使わせてもらっているのだ。

小学生のとき育てたホタルを通して環境について考え直すことができた。限りある水をどう使うかまず一人一人が考えることができた。一度汚れたがまたホタルが戻ってきた私たちの川のように何かが変わるかもしれない。

毎年忘れずに飛んでくるホタルの光、これが私の思う故郷の景色だ。私水が大切にしようと思う理由の一つは、この故郷を守るためである。綺麗な水を今の景色を未来へ残すために動き出すのは私たちである。